赤い鳥症候群（仮題）

漣　連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い鳥症候群（仮題）

【Ｎコード】

Ｎ０８１８Ｚ

【作者名】

漣　連

【あらすじ】

僕の名前は天城夕（あまぎゆう）。ちょっと有名な病気に体を蝕まれた、ごく普通の１６歳だ。突然だけど、こうして記録を残そうと思う。何故なら――僕の命はあと数日で終了するからだ。どうやら、病気は僕の命の灯を吹き消すほどの距離まで近づいてきたらしい。ということで、後々の為にこれを残す。何年後か分からないけれど――将来、再び僕が目覚める、その時まで。このノートが残っていますように――。

プロローグ（前書き）

ＳＦ物…の予定。書けるかどうか今から不安しかありませんが、温かい目でお願いします。また、感想、評価等大歓迎です。酷評でも構いませんのでよろしくお願いします！

プロローグ

たとえ幾星霜の
時が流れたとしても
私は君のことを忘れない
たとえ千太陽が
昇ったとしても
私は君のそばにいるよ
君が孤独で凍えそうになったら
一緒に居てあげる
君は独りじゃないよ
すぐにそこに飛んでゆくから

とある建物の屋上。そこに、一人の少女がいた。目を閉じながら時に強く、時に弱く、抑揚を付けながら歌う。
と、少女が歌い終わった時、後ろからパチパチと拍手が聞こえた。
「お前は、その歌が好きだな。何か理由があるのか？」
少女の仲間であるその男は少女に近づいて、前々から疑問に思っ

ていたことをぶつける。
少女は男に向き直り、感情の起伏に乏しい声音で答えた。
「約束、だから」
「約束？」
「うん」
少女は頷きながら空を見上げながら手を伸ばす。
「大事な、約束」
「ね、夕」
そっと、宝物のように呟いた。

第一話『宣告』

そこは、一面真っ白な部屋だった。俺は簡素な患者服を着てベッドの横につけられた車イスに乗る。自分の手で車輪を回しながら僕は自分の担当医の部屋へと向かった。

「ああ、天城君。こっちおいで」

部屋に入るとパソコンの画面を難しい顔で睨めっこしている先生がいた。自動開閉ドアが開く音で俺が入って来たのに気付いたようで、画面から俺に視線を向ける。

「仙台先生、新しい患者さんですか？」

先生は頭を掻きながらはは、と苦笑する。

「まぁね。やっぱり、病院内の医師の人数が少ないから、自然と一人が受け持つ人数も増えてしまってね」

そう言って先生はくるり、と椅子を回転させて僕と向き直った。

「それで、天城君。君には大事な話があるんだ」

僕は半ば予想していた言葉に、俺は先生が続けるであろう言葉を先んじて言った。

「もう、長くはない、ですよね」

先天性福山型筋ジストロフィー。
それが僕の体を蝕む病気の名だ。大抵の人は筋ジストロフィーという名前だけ知っている人が多いだろう。筋ジストロフィーは簡単に言えば筋肉が次第に衰えていく病気で、呼吸器感染や心不全が主な死因に繋がる。もちろん治療法はまだ、無い。
僕はそれが先天的に発症し、今までの間ずっとこの病院の敷地内で過ごしてきた。僕も薄々感じていたことで、「あ、もうすぐ死ぬだろうな」と、ある日突然思った。野生の勘、というやつなのかも知れない。
先生は悔しそうに何か話していたが、僕はほとんど聞いていなかった。話も終わり、僕は部屋に戻りながらふと思う。明日来る友人たちに、何と言えばいいだろうか。それが目下の悩みだった。

次の日、いつも通り友人たちがお見舞いにやって来た。狭山浩二と笹山菜月。どちらも僕の幼馴染だ。浩二は今時の高校生、という恰好をしていて髪を茶色に染めている。わざわざ髪を染めても大丈夫な高校を受験したそうだから、よっぽど髪を染めたかったんだろうな。指定の制服を軽く崩していて、見たまんまのやんちゃな高校生だ。一方菜月は清楚な佇まいをした女の子で、前髪をヘアピンで止めている。かわいい物好きで今日はアヒルのヘアピンだった。二人は同じ学校に通っていて、その帰りにいつも寄って行ってくれている。
菜月は買ってきてくれた花を花瓶に活けながら口を開いた。

「夕君、また入院している女の子に告白されたんだって？人気者だね」

「何～？お前また告られたのかよ。まったく、相変わらずだなお前は」

浩二は僕にヘッドロックをかけながらじゃれてくる。いつも通りの光景。僕は自分がもうすぐ死ぬことを伝えるべきか否か迷った。

きっと、僕が死ぬということを知ったら、この気の優しい友人たちは悲しむだろう。僕個人としては、出来る限り友人たちの悲しむ顔は見たくなかった。

が。

「もうすぐ、死んじゃうん…だよね？」

「！？」

突然、菜月は何の前触れもなく言った。僕が驚いて目を白黒させていると、浩二がため息を付きながらパイプ椅子にもたれかかる。

「先生から聞いたんだよ…ま、その様子だと俺たちに伝えようか迷ってたってとこか？」

「確かに悲しいけど…私はちゃんと知れてよかった、って思うよ。だって、知らないまま夕君が死んじゃったら後悔するもん」

僕は、二人の顔をまともに見れなかった。恥ずかしいし、悲しいし、気を遣わせてしまったことが悔しいけど――うれしかった。

「ごめん、二人とも。それと――ありがとう」

穏やかな空気が僕たちの間に流れる。すると、部屋に先生が入ってきた。

「やぁ、君たち。いつもありがとう、天城君のお見舞いに来てくれて」

そう言って先生は僕に向き直る。

「それで…決めてくれたかい？昨日の話は」

「昨日の…？」

僕はそう言われて全然話を聞いていなかったのに気付いた。

「すみません…何の話でしたっけ」

「…はぁ、やっぱり聞いていなかったのか。上の空だったからもしや、と思ったが。じゃあもう一度言おうか――クライオニクスを、受けてみないかい？」

クライ…オニクス？

何ですか、それ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0818z/

赤い鳥症候群（仮題）

2011年12月3日00時48分発行